

中野拓哉作 脱出の道

< 前編 >

- 奥田和彦 支店長。例のブルー・スプリング・コーポレーションの融資の件、何とかならないでしょうか？
- 柳沢支店長 うーん。...よし、やるか！ 融資の限度額はかなり超えてはいるが、どこでもやっていることだ。あそこの会社はこの支店を全国でもトップクラスにしてくれたほどの大得意先だし。まあ、君が取り仕切ってくれたら、大丈夫だろう。奥田君、頼んだぞ。
- 奥田 ありがとうございます。この件は全責任を持って頑張ります。いやぁ、実は社長にも泣きつかれていて困っていたんです。これでわたしのメンツもつぶれずに済みます。
- 支店長 いやぁ、それにしても君の営業力には感心させられるよ。
(ノック音)
- 君島美幸 失礼いたします。お茶をお持ち致しました。
- 支店長 おぁありがと、ありがと...君島君。君はいつ見てもきれいだね。ねえ、彼氏とかいないの？ 今夜よかったら一緒に飲みに行かない？
- 美幸 いいえ。今夜はちょっと約束があるので。
- 支店長 そんな冷たいこと言わないでさぁー。
- モノ もー。和彦ったら。何で助けてくれないのよ。
- 美幸 失礼いたします。
- 奥田 それではわたしもこれで。後はお任せ下さい。
(ドアを閉める音)
- 奥田 (小声)美幸、後でな。
- ナレーション わたしの名前は君島美幸。光銀行に入行して4年目の銀行員。実はこれでも営業部員...と言ってもお茶くみや雑用の毎日。外回りは男性行員の仕事でたまに外にでられたとしても荷物持ちか、癖のあるお客様からのクレーム処理。怒りを和らげるクッション役。それに今話題のセクハラブームで、支店長が代わってから支店内の雰囲気も暗くて覇気がない。と、まぁそんな職場での唯一の救いと言えれば同じ大学の1つ上の先輩、奥田和彦がいることだ。付き合って2年目でついこの前わたしにプロポーズしてくれた。彼は、営業部の若手ナンバーワンのホープで、主任であり上司でもある。
- 奥田 ごめん。いやぁブルー・スプリングの社長に付き合わされちゃって。これでもダッシュできたんだから...あれ？ 怒ってるの？
- 美幸 別に....

奥田 いや、怒ってる顔だよ。じゃあ、何でだよ。

美幸 今日、会社で...和彦どう思う？ もー柳沢支店長のやつたら。まだ和彦がいたからいいようなものの、二人きりになった時なんか、もっとひどいんだよ。まったく人のことをなんだと思ってるのかしら。それにうちの会社って女性に対してろくに仕事もさせないし責任ある役職だってほとんどなれやしない。大体雇用機会均等法という法律があることすら知らないんじゃないの。

奥田 まぁそういうなよ。ほかの子たちはもっとうまくやってるじゃん。それに、美幸が思うほど、おれたちの仕事は楽じゃないんだからな。女には、とうてい無理じゃない？ キャリアウーマンとか言ったって、結局マドンナブームとか何とか言ってた一時期のことで就職だって歴然とした差を初めからつけられちゃうんだから。それに女なんて仕事のことを結婚するまでの腰掛けぐらいにしか考えてないんじゃないの？ 美幸だってそうだろう？

美幸 ひどーい。そんな言い方ってひどすぎる。それって女性蔑視^{べっし}じゃない？ 仕事だって無理かどうかやってみないと分からないじゃない。もういい、やっぱ和彦には分かってもらえないんだ。

奥田 おい、美幸。おい、どうしたんだよ。おーい...

ナレーション わたしは感情の高まりを抑えきれず、和彦を振り切って走り出していた。気がつくと自分のマンションの前だった。

モノ あーあ。またやっちゃった。

ナレーション この所、何か満たされないと言うか、自分にいら立ってしまうことも多くなっていた。それというのも和彦にプロポーズされてから、うれしい反面、このまま家庭に入ってしまったていいのかと、改めて自分の仕事とか人生とかについて、やけに気にかかり出していたからだ。そんなある日のこと...

沢田緑 ねえねえ、美幸。知ってる？ 今度うちの会社で、“女性の職場を守る会”とかいうのができるらしいよ。何でも、セクハラ問題とか、職場での地位改善とかを取り上げるんだって。それだけじゃなくて、汚職とか不正のたぐいまで追及するんだってよ。

美幸 ウッソー。知らなかった。そんな動きがあるなんて。でも、面白そうじゃん、そういうの。うちの組合なんか御用組合もいいところでしょ？ そういう問題って今までうやむやにされてきたから、この辺でちょうどよかったんじゃないの？

緑 バッカねえ。今まで女ってだけで甘えられていたのよ。それをわざわざ自分の首を絞めるようなことをしなかったって。月々の会費だってバカになんないし。でもそうなると、あの支店長がセクハラでつるし上げられるのを間違いなく見られるし、そうまんざらでもないか...

美幸 そうよ、そうよ。

緑 そういえば、集会に誘われてたんだ。わたしは興味ないけど美幸、行ってみた

ら？

美幸 えー、緑も一緒に行こうよ。

緑 う、うん。わたしは別にいいけど。でも、週末の夜だよ。奥田さんとデートとかないの？

美幸 いいの、いいの。それより、なァんか面白そう。

ナレーション そしてその週末、緑を引きずるようにしてその“女性の職場を守る会”の集会に参加した。

美幸 何だ。もっと大勢いるのかと思った。

緑 しー！ もう、声大きいよ。

美幸 ご、ごめん。

永井ゆかり えー、それではそろそろ始めたいと思います。わたしは、この“女性の職場を守る会”の会長の永井ゆかりと申します。ほかの皆さんにも後で自己紹介をしていただきます。この会の主旨は、わたしたち女性がただ女性と言うだけで差別されたり、不当な扱いを受けることに対して団結して戦っていくこと。またそこにとどまらず、わたしたちの光銀行をより良く改善していくことです。...えーそれで今日は、わたしの行っている教会の牧師で元弁護士の山内先生に来ていただきました。先生にはこれからも、法律的な、又人道的な見地からいろいろ相談に乗っていただけたらと思います。

ナレーション その場での話し合いはあまり専門的になりすぎず、とても分かりやすくまた、何よりも一人一人が問題意識を持って積極的に討議に参加していることに驚かされた。面白半分に出席してしまった自分が恥ずかしく思えた。

永井 それではそろそろ時間ですので、お話はこの辺にして、また次回にしたいと思います。皆さんお疲れ様でした。

(ガヤ)

永井 あっ、ちょっと待って。新橋支店の沢田さんと君島さんだったわよねえ。ようこそ来てくれました。良かったら夕食でも一緒にどお？

美幸 あ、は、はい。緑もいいよね。

緑 あ、う、うん。

ナレーション ...と成り行き上ほかの何人かとも一緒に、夕食をご一緒することになった。

永井 今日の集会、どうでした？

美幸 え、ええ。何かわたしたち場違いなような気がして...。皆さんあんなに真剣に話し合っていて。でもどうしてあんなに真剣になれるのか。中には共稼ぎで生活が懸かってるって方もいるでしょうけど、ほとんどの方が独身でも、みんなすごく考え方が前向きで、しっかりしているっていうか。それに比べて、わたしなんか...

永井 それは、男性中心の会社組織の中で、みんな必死で自分を失わないようにし

ているんじゃないかなあ。

緑 じゃあ永井さんは、何でこんなことしてるんですか？

永井 それはきっと...罪に負けたくない...から、かな。

美幸 罪に...ですか？

永井 そう。女性の能力と人格を正当に認めようとしない男性中心の組織の罪。そして、心のどこかで、その上に乗っかって、安易に生きようとする自分自身の罪にね。

ナレーション クリスチャンで、そんな風に考えるのか、とわたしは思った。でも、その罪という言葉はなぜか心に残った。それからわたしは、緑が行かなくても一人で“女性の職場を守る会”の集会に出かけて行くようになった。一方、社内では予期したように会の存在を煙たがる一部の役職者によって圧力がかけられていった。

奥田 なあ、美幸。女性の何とかって言うの、もうやめちまえよ。実はさあ、支店長からも君を抜けさせろって言われてんだよ。そんなのやめて、おれと結婚しちゃえよ。そしたら、おれたちのこと支店長にもちゃんと言うから。

美幸 そんなのずるいよ。だって、和彦そんなの一方的！

奥田 しーっ！ 聞こえるだろ。なあ、美幸、頼む。考えといて。

ナレーション わたしは、和彦の中にも、永井さんの言っていた男性中心の思いをモロに見て、心が暗くなった。それから数日後のことだった。

美幸 おはよう緑。何かうちの支店の前、騒がしいけど何かあったんですか？

男 何かじゃないよ。お前、知らないの!? ブルー・スプリング・コーポレーションへの不正融資が発覚したんだよ。奥田もヤバいんじゃないの？

美幸 ふ、不正融資！ 和彦が!?

ナレーション わたしの頭の中を、永井さんの言った罪という言葉が、一瞬恐ろしい力で駆け巡った。わたしは、独りぼう然とその場に立ち尽くしていた。

< 後編 >

緑 ...美幸？ 美幸！ 大丈夫？

美幸 はい、え、あ、緑。あ、う、うん、大丈夫。

緑 あんなことがあったばかりなんだから無理しないで休めばよかったのに。あ、そうだ、美幸。今日ってあの“女性の職場を守る会”の集会がある日じゃない？ 行って相談してみたら？

美幸 うん、そうする。ありがと。

ナレーション その日の夜の集会は、やはり不正融資事件の話題で持ちきりだった。その集会の後、わたしは思い切って永井さんに相談した。

永井 そう。奥田君て君島さんの彼氏だったの？ でも大変だったね。で、奥田君

は？

美幸 ええ、デスクの方には一度も。マンションも留守電だし、一度だけ携帯の留守電に和彦らしい無言電話が入っていたけど…。

永井 …であなたは大丈夫なの？

美幸 …わたし、どうしたらいいか…分からなくて。(泣き出す)

ナレーション 永井さんの優しい声を聞いたら、張り詰めた糸が切れたように、涙が止まらなかった。

永井 よし、よかったら、これからうちに来ない？ ごちそうできないけど夕食一緒にしながら相談しよ。わたしのかわいい天使にも会ってやって。

ナレーション そう言うと永井さんは、タクシーを捕まえてわたしを引きずり込むように中に入れた。彼女のうちに着くまで、わたしの手を握ったまま、彼女は目をつむり何かつぶやいていた。それが何なのかは分からなかったが、しっかりと握ったその手の暖かさが、不安と恐れにつぶされそうなわたしの心を包んでくれるようだった。

(ドアの開閉)

永井 ただいま。おっ。よしよしなかなかきれいである。偉いぞ。

明憲 こら、遅いぞ！ まったく、もー！

永井 ごめん。ごめん。あ、お客さんよ。会社の人で君島美幸さん。これがわたしのかわいい天使…。

明憲 永井明憲。小学3年です。

美幸 えー、永井さんてお子さんいらしゃったんですか。っていうことはご結婚…。

永井 はい、ストップ。その後は食事が終わってからにしましょ。あっ君、お祈りして。

明憲 はいそれでは、お姉ちゃんも手を組んで…。神様、今日一日、お母さんと僕を守ってくださって、ありがとうございます。今日はお母さんの会社のお客様も一緒に夕ご飯を頂けて、ありがとうございます。…

モノローグ そうか、永井さんも車の中でお祈りしてたんだ。じゃあれは、わたしや和彦のために祈ってくれたのかな…。

ナレーション なぜかその時、わたしは祈りを聞いてくれる存在、神がいるような気がした。

3人 いっただっきまーす。

ナレーション 決してぜいたくなものではなかったけど、ここ数日、無理に食べ物を流し込むだけだったわたしには、最高においしい食事だった。昼間、サッカーで走り回ったという明憲君は、早々と隣の部屋で布団に潜った。

永井 お待たせ。死んだように眠ってるわ。驚いたでしょ？ そう、実はこう見えても母親なの。そして9年前までは妻でもあったわ。わたしの主人は今の奥田君ほどではないにしても、やり手の銀行マンだった。結婚してからも共働きだったけど結婚生活は楽しいものだったし、お互いとても充実していた。そしてわ

わたしはあっ君を身ごもって二人とも家族が増える日を心待ちにしていた。そんなある日、彼の昇進の話が持ち上がった。当然彼は喜ぶはずなのに、なぜか日に日に仕事に対して無気力になり、大きくなっていくわたしのおなかを見てはため息をついていた。でも何を聞いても答えてはくれなかった。きっとわたしに心配を掛けまいとしてたのね。そして、ある日、会社から電話があった。(BG音声) 主人が会社の屋上から飛び降りたって。

(バックグラウンド音声)(電話呼び出し音、受話器を取る音)

永井 もしも永井ですが。え!? 主人が!?

ナレーション わたしは言葉も出なかった。永井さんはなおも淡々と話を続けた。

永井 主人は、昇進をエサに数十億の融資話をまとめるために贈賄をさせられ、その責任を負わされていたらしいの。でもその時会社は自殺をいいことにすべての責任を彼になすり付け、しかも原因をノイローゼとして片付けてしまったの。すべてが分かったのはバブルがはじけた5年も後だった。

美幸 ひどい...

永井 わたしもその時は、生まれたばかりのあっ君を抱えて、ただ死ぬことだけ考えていたような気がする。でもそんな時、ポストに入っていた教会案内から山内先生に出会い、そしてイエス・キリストに出会った。山内先生は一部始終を聞いてくれた後、聖書のここを読んでくださったの。「あなたがたの会った試練は、みな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ耐えることのできるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」(1コリント 10:13)この言葉には本当に勇気づけられた。それから聖書を読んだり、教会でいろんな話を聞くうちに少しずつ分かってきた。自分の会社の利益、せんじ詰めれば自分の利益や地位や権力のために不正なことをするのは、神様から離れた人間の罪なんだった。主人はその罪の誘惑に負け、それを解決する方法も分からず、独り悩んで死を選んだ。だけど、わたしも神様の前では同じ自己中心の罪人だし、認められるために、いろんな汚いこともやってきた。でもわたしは、神様を知って、その罪をありのままに神の独り子のイエス・キリストの前に悔い改めて、許していただいた。そして、あっ君を神様から残された恵みの贈り物として、女一人で生きていく力も与えられた。

ナレーション まるでキリスト教音痴のわたしには、恐ろしく難しい話だったが、日ごろの彼女をこの運動にかけさせているものは何だろうというわたしの疑問に、ああ、これだったのかと納得させる、不思議な説得力を持っていた。

永井 わたしね、ある意味で主人の死を背負って生きてきたような気がするの。それは重荷と言うよりクリスチャンとして、罪許された者として、“主人の死を無駄にしたくない。一緒に負ってあげられなかった死ぬほどの苦しみを、今味わっ

ている人の手助けがしたい”っていう気持ちかなあ。それが、たまたま女性のわたしから見ると、組織のエゴや性差別の中で、まだまだ弱い立場にあって人知れず悩み苦しんでるのは女性だから、そこからってことなのね。だから目標は女性だけではなくて、男性も含めて、すべての人ってことかな。君島さん。奥田君は今、まさにその人なのよね。大丈夫、神様は信じる者に「脱出の道」を備えてくださる。祈りましょう。

ナレーション あれから半年たった。永井さんの言ったとおり、神様は本当に脱出の道を備えてくれた。それはほとんど奇跡だった。わたしは、ためらわずにこの生きている神様を信じた。

美幸 でもよかった。あの時は和彦が自殺しちゃうんじゃないかって本気で心配したんだから。

奥田 オーバーだなあ、美幸は。でも美幸が支店長印の付いた稟議書りんぎのコピーを持っていてくれたお陰で、ほんと助かったよ。当分、いや、一生頭が上がらないかな。それに“女性の職場を守る会”の永井さんや山内先生も親身になっておれを援護して下さったし。お陰で始末書と3か月間の減俸で済んだ。

美幸 そして、山内先生の司式で今日は晴れの結婚ゴールインだもんね。でも本当はもっともっと和彦が思いもつかないほどの大人物が動いてくれたんだよ。

奥田 分かったよ。神様だろ。

美幸 そうよ。わたしは永井さんが家庭でできなかった、神様の前での男女平等を、今日からの二人の生活で実現していくんだから。

奥田 カンベンしろよ。

美幸 そのカギは、分かってる？ 和彦。

奥田 ハイハイ。「日曜日は教会へ」だろ。でもこの際だから、ひとつマジで言っとくよ。おれ、半年前まで美幸に言ってきたことだけど、撤回する。これからはずっと仕事続けていいからさ。もちろん“女性の職場を守る会”の活動も。

美幸 当たり前でしょ。何を今更もっともらしく言ってるのよ。これからはピシピシ、職場を改善していくわよ。

奥田 おーこえー。今度は“男性の職場を守る会”っていうのも作らなきゃな。

永井 お二人さん。そんな所で漫才やってないで。そろそろ出番よ。新郎は講壇の前で花嫁を迎えるの。うれしくてもあまりニヤニヤしちゃダメよ。

明憲 お姉ちゃんはこっちこっち。僕の後を歩くんだからね。

美幸 はい、はい。分かってます。

(結婚行進曲)

ナレーション バージンロードを歩きながら、わたしは祈っていた。「神様。本当の男女平等を、まずこの家庭から始めます。そのために愛をください」と。

(完)